

# 第 3 回

## 札幌市高齢者健康寿命延伸検討委員会

### 会 議 録

日 時：2023年8月28日（月）午前10時開会  
場 所：札幌市役所本庁舎 10階 市長会議室

## 1. 開 会

○事務局（西村高齢保健福祉部長） 開始時間となりましたので、第3回札幌市高齢者健康寿命延伸検討委員会を開会いたします。

札幌市保健福祉局高齢保健福祉部長の西村でございます。どうぞよろしくお願いいたします。

委員の皆様におかれましては、7月の第2回委員会に続きまして、お忙しい中をお集まりいただき、ありがとうございます。

それでは、事務進行につきましては、梶井委員長にお願いしたいと存じます。よろしくお願いいたします。

## 2. 議事1

○梶井委員長 梶井でございます。

皆様、暑い中お集まりいただきまして、本当にありがとうございます。3回目になりましたけれども、本日もどうぞよろしくお願いいたします。

前回は大西委員から大変貴重なご講義をいただきましてありがとうございます。おかげさまで我々の議論もかなり重層的なエビデンスの付いた議論になったかと思えます。本当にありがとうございます。

それでは、早速議題に入っていきたいと思えます。最初の議事ですが、「これまでの委員会における問題提起・ご提言」について事務局にまとめていただきましたので、ご説明をいただきたいと思えます。

○事務局（横谷調整担当課長） 高齢保健福祉部調整担当課長の横谷です。よろしくお願いいたします。

お手元にお配りしております、右上に「資料1」と記載のホチキス留めの資料に基づき、ご説明させていただきます。

こちらの資料ですが、第2回委員会におきまして皆様から頂戴しました新しい視点のご意見に加え、大西委員からも科学的な根拠に基づく研究データ等をお示しいただいたところであり、これらの要素を落とし込んだものとなっております。

全体の構成としましては、前回の資料と同様、健康や高齢者に対する概念や思いを赤囲みで、実際の取組につながる考え方等は黄色囲みでまとめております。

前回は資料を1枚にまとめ、それぞれの要素を取り込んでいましたが、今回は少しボリュームが膨らんできましたので、項目ごとにペーパーを分けております。

それでは、これまでの議論の振り返りを兼ねまして、簡単にご説明させていただきます。

資料1枚目につきましては、「方向性」の部分でございますが、ライフコースを意識した対策やポピュレーションアプローチの視点で施策を展開していくことの重要性、スティグマを生じさせないような対策、エビデンスを多角的に捉える必要性等についてご示唆を

いただいたところです。

1枚おめくりいただきますと、次は「高齢者が活躍する社会への思い」となっております。こちらについては、老いをつくらぬ環境を増やしていくことや、老いに対してポジティブなメッセージを発信していくこと、また、高齢者だけでなく、幅広い世代に意見を聞く機会をつくるべきというご提案もございました。これらの要素を下の方にあります「新たな視点」に加えさせていただいております。

次に、1枚めくっていただきまして、「健康づくり」についてです。こちらでは、年齢を重ねても歩行速度が維持できていることや季節による活動内容の差に着目することが重要であるというご意見、さらに、歩数をはじめとした身体活動に関しては個別に最適な目標を設定する必要がある、一律に決められるものではないといったご指摘も頂戴したところでございます。

1枚めくっていただきまして、「つながり」のまとめとなりますが、アフターコロナにおきましては、社会参加のある方は身体活動が戻りやすい傾向にあること、裏返して言えば、社会参加の少ない方は身体活動が戻りにくい傾向にあるといったエビデンスがございましたことや、スポーツなども複数人で取り組むことで効果が高まる可能性があることについて、エビデンスをお示しいただきました。

次に、「動機付け」のページについてでございますが、精神的な楽しみや幸せが目的であって、自然と活動につながっていることが理想だということや、先ほどの「つながり」と関連して、家族や友人と一緒に取り組むことが効果的であることなどについてご意見をいただきました。

最後、下段ですけれども、こちらは新たに加えた要素でございますが、「デジタル活用」といたしまして、これまでの議論を踏まえて新たに項目化したものとなります。内容としましては、特に高齢者世代のインターネットやスマホ利用者が増えていることや、SNSを活用している高齢者も増加傾向にあること、さらに札幌市で行った実証実験の結果について記載しております。

非常に簡単ではございますが、資料の説明は以上でございます。

○梶井委員長 ありがとうございます。只今、1回目・2回目の委員会を含めまして、この委員会でどのような議論がされ、どういう問題提起、提言がなされてきたのかを大変わかりやすく、要点を絞ってまとめていただきました。振り返りまして皆様の方から、ここは強調すべきとか、ここが漏れているとか、何かございましたらご意見、ご質問等承りたいと思いますけれども、いかがでしょうか。

私の感想としては、内容については申し分なく、よくまとめていただいたと思っております。些細なことを申し上げれば、2ページ目の「高齢者が活躍する社会への思い」ですね。色々な「社会への思い」というのはあるわけですが、「高齢者が活躍する社会への思い」を抱いたと、もしくは「思い」についてこれからみんなで考えよう。本当に

文学的と言いますか、哲学的と言いますか。“への”という助詞に、「社会への思い」を会議でまとめて市民に提示していくのだなというところが、細かいところですがグッときております。

○山本委員 私も、内容については正しいと言いますか、よくまとめていただいていると思っております。

1点だけ、もう少し先に言うておくべきだったと思うのですが、「健康寿命」というのが今回のメインテーマで、特に身体的健康について、多く議論したと思っております。改めてまとめを見て、振り返って気付きましたが、社会的健康が重要だという指摘がこのなかには沢山入っていますよね。その点を我々もよく考えなければいけないと思いました。なぜかという、社会には身体に不自由のない方だけではないわけです。障がいのある方もいらっしゃるわけですし、要介護状態になった方もいらっしゃいます。仮にそのような状態となったとしても、社会的参画というのはおそらく可能なわけですよね。そういう視点で見て、健康寿命あるいは健康状態に、「社会的健康」という言葉をどこかに入れたらいいなと思いました。

○梶井委員長 ありがとうございます。私も本当にそのことはすごく感じました。実は、3枚目に「健康づくり（身体的健康）」、4枚目に「つながり（社会的健康）」と書いてあって、フィジカルな健康だけではなく、社会的な健康も同等に重要視しているということがここに現れていて、そこは本当に我々の2回の議論のなかで1番の肝だったと思えます。前回の大西先生のご講義もそういったところをかなり強調してくださっていて、この整理は括弧の部分が凄く良いと思えます。

○山本委員 そういう点をコメントしておきたいと思えます。

○梶井委員長 ここは皆様も同じだと思えますけれども、思いを共有した点だと思えます。他にいかがでしょうか。

また、「デジタル活用」という点も新たな項目として位置付けたということですがけれども、これは方向性がかなり具体的になって良かったのではないかと私は思っております。

○山本委員 結局、社会的活動への参加とか、活性化に「デジタル活用」が大きく寄与できるということだと思えます。そういう意味でも重要だと思えます。

○梶井委員長 そうですね。

ほかに皆様何かお気づきの点はございますでしょうか。よろしいですか。

（「なし」と発言する者あり）

○梶井委員長 では、全体を通してまた戻ってくる場合がございますので、資料2について事務局から説明を加えていただきたいと思います。『これまでの議論を踏まえた今後の方向性について』というところでまとめていただいております。よろしくお願いいたします。

### 3 議事2

○事務局（横谷調整担当課長） それでは、同じホチキス留めの資料の次のページをめくっていただくと、右上に白い囲みで資料2-1とございます。こちらの資料に基づいてご説明させていただきます。

こちらにつきましても、前回第の委員会でお示ししました資料をベースに、前回の議論から導かれる要素を加えたものとなっております。

まず、一番上の「方向性」につきましても、こちらは前回までの議論を踏まえまして、当初は“高齢者が”となっていたところを、「人生の目的に少しでも長く取り組みつづけるために、“誰もが”楽しみながら自然に健康になれる環境を整え、健康寿命を延ばしていく」としております。

委員ご指摘のとおり、健康寿命の延伸は高齢者だけでなく全世代で取り組む必要がありますことから、札幌市として、すべての世代に対する取り組みを行うということを明確にしたうえで、当セクションとしましては、特に高齢者向けの施策として構築していくことを目指してまいります。

次に、個別のメニューにつきましても、まず「健康づくり」では、年齢を重ねても活動が維持できていることが重要であるとの考え方を明記しております。また、季節による活動内容や量の差に着目することについて追記いたしまして、この点に関して具体例に記載をしております。

その次の「つながり」では、相互扶助の要素を新たに加えているほか、施設につきましても市有施設に必ずしも限る必要はないというご指摘を反映いたしまして、修正を加えさせていただきました。

次に「動機づけ」では、「市民理解」の部分で、ひとりでも多くの方に取り組んでいただくための考え方として、ポピュレーションアプローチの視点を加えたほか、事業構築にあたっては幅広い世代の意見を取り入れていくことについて記載をしております。

最後に「デジタル活用」では、高齢者のインターネット利用率やSNS活用の増について記載したほか、魅力的なUI・UXの視点を加えております。また、社会的なつながりを維持するためのICT活用という部分も新たに記載させていただきました。

もう1枚おめくりいただきまして、資料2-2をご覧ください。

こちらは、施策のイメージにつきましても、前回の議論を踏まえてご意見を反映し、アップデートしたものでございます。

新たに追加したものを赤色の文字で記載しておりますが、特に、家族や友人と取り組ん

でポイントが加算されることや、季節に応じた活動の評価、また「うれしいこと、楽しいこと」をポイントにするといった部分については、今後事業を具体化していくに当たって特に重視していきたいと考えております。

簡単ですが、説明は以上でございます。

○梶井委員長 ありがとうございます。

資料2-1として今後の方向性について1枚でまとめていただき、ご説明いただいたわけですが、これは資料1と繋がった形になっておりまして、さらにわかりやすく、具体例を入れたものになっております。

資料1を含めまして、資料2の具体的な方向性というところにきておりますけれども、両方あわせまして、皆様からまた新たな視点や追加のご意見があればいただきたいと思います。

例えば、資料2-1はA4の1枚ものになっており、紙面の都合もあろうかと思いますが、左側の「健康づくり」、「つながり」、「動機づけ」、「デジタル活用」の各項目について、先ほど山本委員からもご指摘のありました健康の各要素をより強調するのであれば、「健康づくり（身体的健康）」、「つながり（社会的健康）」といった括弧付けを、A3に資料が大きくなった際には追記してみるという手もあるかなと思っています。

それから、「つながり」のところ、「相互扶助」、どうしても年を重ねていくと皆が健康をずっと維持し続けることはできないわけです。でも、どこか不都合が起きて、気軽に「助けて」と言える関係性づくりですとか、そういう社会的つながりを若い頃から構築することが必要だということも含めて、強調しておく必要があると感じました。

今年の4月から「札幌市未来へつなぐ町内会ささえあい条例」が施行されたわけですから、最終的にはそこともタイアップしたような書きぶりができるといいですね。あの条例は、札幌では町内会を中心とした社会的なつながりが特に必要なんですよという理念を謳っているわけですから、そのことと社会的健康というところが繋がってくる、色々な札幌市の施策と絡んでいくような見せ方も必要かなと感じた次第です。

○山本委員 取組の目的は、健康寿命を延ばす、高齢者の社会参画を増やすというところですが、札幌市全体でそういうことが活発に行われているということが見えることが重要だと思っています。ムーブメントと言いましょか、札幌ではこういう活動が自然に行われているということが見えていくことが重要だと思います。単にこういう制度がありますよ、とか、あるいはエビデンスが悪い訳ではないけれども、取り組んだ結果要介護認定された方の数が減りました、ということだけではつまらないと思うんですね。

1番大事なのは、やっぱり札幌市というコミュニティが外から見て羨ましいと思われたいというのが私の考えの根底にあります。そういう憧れの的などところを見せる仕組みを、ぜひこの中に持っていてほしいなと思うわけです。

行政にありがちですが、KPIを作って達成したということで終わっちゃいけないと思います。少し贅沢なお願いになるのですが、ぜひモデルケースになるようなトライアルをこの中に入れて欲しいなと思いました。

○梶井委員長 ありがとうございます。

そこに重ねて申し上げたいのですが、本当に山本委員がおっしゃるとおりで、じゃあ札幌市でどんなことをやっているのかという事例として、「札幌彫刻美術館友の会」という団体が凄く長く活動しています。何をやっているかというところ、札幌の彫刻の清掃ボランティアをやっているんですよ。私も初めて知りましたが、札幌市内には、大通公園や創成川沿い、中島公園にも、彫刻がたくさんあります。その中でターゲットを決めて、今年はここを清掃しましょうって清掃ボランティアをやられていて、私も興味があって聞いてみたんです。そうしたら、今までは高齢者の方が凄く多かったけれども、最近では大学の学生さんも一緒に活動に参加してくれるようになったとおっしゃられていて、若い方にも凄く広がってきているなという風に思ったんです。

何を申し上げたいかと言うと、札幌市には民間の人達の活動によって支えられているものが掘り出せばもっともっとあるので、そういうものも掘り起こして、他都市から羨ましいなと、それを元に老若男女を問わず、社会的活動をしているということを見せていければなと感じております。

○大西委員 山本委員がおっしゃったことにも関係するのですが、札幌市は社会的健康度がどれくらい高いのかということは何で見せるのかというところが重要ですが、人と人のつながりがどれくらいあるのかということ、何か数字で見せたり、視覚的に見せたりすることはなかなか難しいのかなと思います。

そういう意味では、今回のデジタル活用というところは切り口になるのかなと思っております。ポイントの獲得方法についていえば、例えば家族や友人と何か通信してポイントを獲得したのか、あるいは友人と一緒にどこかに外出してポイントを獲得したのかなど、デジタルで記録が残るところがひとつの強みだと思うので、つながりを可視化する要素として見せることは考えられますよね。

「デジタル活用」のところに、健康づくりや社会参画といった健康につながる要素が、札幌市全体でどれくらい向上しているのかを見せる機能を持ったデジタル活用というか、そういう形になるのが良いのではないかなと思いました。

○梶井委員長 ありがとうございます。

他にも、アプリから色々なポータルサイトに飛べて、今できるボランティア活動はどういったものがありますかとか、そういった情報が拾えるようなデジタル活用も含めていただくというのもあるかなと思っております。

○山本委員　そうですね。今ね、社会的健康度をどのように測るのかという話で、マスメディアを例に挙げると、テレビであれば視聴率、新聞であれば発行部数と、測り方があるんですよ。ところが、SNSだと、個々の統計量みたいなものがどんどん小さな組織に分かれてしまっていて、全体が見えなくなるんです。これは、私が懸念しているところなのです。

SNS化すると、実は凄く活発なんだけれども、そのコミュニティの中からはしか見えない、外の人からは全然わからないという、そういう状況が起こるのです。これに対して、行政なのか、あるいはメディアなのかはわからないけれども、そういった活動実態を外に取り出すような仕組みができれば良いと思います。具体的にどうすればいいかは、まだ全然わからないんですけれども。

かつてマスメディアが興ったときには、マスメディアを見ていると大体世間がわかるという意味で、世の中が非常にわかりやすかったと思います。では、今のインターネットの空間がわかりやすいかと言うと、セクト化しているんですよ。それをオープンにするような場が札幌にはあるという、そういうことが起こると凄いなと思いますね。

先ほど委員長がおっしゃった団体とはまた別に、「カルチャーナイト」というイベントがあって、私はその代表をやっているのですけれども、そこにも多くの高齢者の方々がボランティアで参画してくれていて、毎年万単位です。一晩だけですが、万単位の方が参画するイベントになっているのです。けれども、我々も一生懸命頑張っただけで広報するのですが、実際にどんな活動をどれくらいの規模で行っているのかが中々見えなくて。そういうものを行政がサポートして、表に出すようにプッシュしてくれると良いのではないかなと思います。高齢者の活動ですとか、あるいは社会参画、社会アクティビティのようところを積極的にプッシュする、そういうのがいいのかなって私は思っています。

○梶井委員長　ありがとうございます。

○高野委員　私、たまたま中学校の同窓会を9月にやるのですが、今回から出欠の確認を全てLINEでやろうということで、70名位、40名×5クラスなのでおよそ4割弱が登録しています。仕組みとしてはLINEの画面から出欠を入力できるページに飛んで、出欠を入力するというものですが、実は70名のうち4割くらいしかその操作ができなくて、残りの6割はページにたどり着けていません。なので、操作できる人が代わりに「あの人は出席しますよ」といったことをLINEでやり取りして、その情報を元に出欠を入力してあげているというのが実態となっています。

そういう意味では、資料の書きぶりで、「スマホを持っている人」と「持っていない人」でデジタルデバイドが生じている、と読み取れるのですけれども、実はスマホを持っている人の中でも、若者が考えるような使い方はできないという人がかなりいらっしゃるの



す。本当にLINEで文章のやり取りをすとか、電話をかけるとか、シンプルな操作はできるけれども、そこから次のアプリに飛んで、ああして、こうしてとなると途端にわからなくなる方が結構いらっしゃる。そこは、スマホを持っているから皆が使いこなしているというわけではないことを意識しなければならないと思います。アプリを作ったら皆がそれを使えるだろうとは決して考えないで、例えばそこに、スマホの操作に長けたリーダーのような人材を置くだとか、そういう仕掛けをしていかないと本当に宝の持ち腐れになるんじゃないかなと思います。

63歳の人間が出欠管理ページに半分も飛べなかったということに衝撃を受けておりました、そういう実態なんだなと思いました。

○山本委員 そこに関して言うと、やはりコミュニティが重要なんです。近くに詳しい人がいて、その人に代行してもらおうとか、そういうこともつながりがあればなんとかなるのです。それが技術で分かれてしまっている社会が怖いんですね。つまり、技術は技術で有効に使うべきだけれども、技術を使う人達のコミュニティがしっかりしていなければ、真価が発揮されないと思うのです。

○高野委員 そうですね。そういうことを合わせ技でつくっていかないと、アプリ単独で作っても使われていかないかもしれませんね。

○山本委員 全くそのとおりだと思います。

○梶井委員長 だからこのことをきっかけに、また教え合う仕組みができるといいですね。

○山本委員 そうですね。

○梶井委員長 教え合うことでつながる仕組みとか、そういう風に広がっていくべきですよ。前提として、「みんな分かっているはず」という考え方はやめた方がいいでしょう。

それから、情報のセクト化というご指摘がありましたけれども、本当にボランティア、カルチャーナイトもそうです。札幌は、色々なアートボランティアのある世界的な文化芸術都市であることを標榜しているわけですから、個々に活動している芸術系のボランティアのような、セクト化した情報を行政がプラットフォーム化して発信できるという工夫が必要ですし、それなしに「社会的つながりをしてください」と言っても中々どうやって社会的つながりを見つけたら良いんですかということにもなりかねませんので、それを見つけやすいような仕掛けも必要かなと思います。

他に皆さんいかがでしょうか。何かお気づきのことありましたらお願いいたします。

○平本委員 意見よりも質問に近いのですけれども、この「デジタル活用」のところではアプリを使って、色々なインセンティブを与え、ポイントを付与するということは、これまでも共有してきたところです。では、具体的にどんなコンテンツを作るかという部分は、行政が担っていくのか、あるいは民間にコンペのような形で広く募って中身を充実させようとお考えなのか、方向性をお聞かせいただきたいということです。私としては後者の方が盛り上がるのかなというような気がしているのですけれども、いかがでございましょうか。

○事務局（西村高齢保健福祉部長） 今の想定としては、今までご議論いただいたものをベースに基礎的な部分をまずしっかり行政の方で作りにみたいと思っております。そのうえで、まさに平本先生からご指摘いただいたような、民間の方々が参加できるような仕組みをしっかり整えていきたいと考えています。

我々が作ったものでスタートして完結するというよりは、その後も広がっていく仕組みになれば良いと思っています。

○平本委員 わかりました。梶井委員長から、行政がプラットフォームをというお話があったので、まさにプラットフォームを提供するのだけれども、プラットフォーム上の様々なものに対しては、色々な知恵を有効に活用しながら広げていくというのが方向性としては良いのかなという気がいたしました。以上でございます。

○梶井委員長 ありがとうございます。これからどのように具体的なコンテンツにつなげていくかはまた議論を深めていくことになろうかと思っておりますけれども、民間の力をどう活用していけるのかという、そういう視点でも広げていただければということになるかと思っております。

ありがとうございます。ほかに何かご意見がありましたらどうぞ。よろしいでしょうか。

（「なし」と発言する者あり）

○梶井委員長 では、大体1回目、2回目とかなり深まった議論をしていただきまして、ここまでまとまってきたというところでございます。

それでは、この2回、今日は3回目ですけれども、議論の流れを踏まえまして皆様からの感想ですとか、今後の社会への思いなど、お一言ずつご意見をいただければと思います。

それでは、あいうえお順というところで、大西委員からお願いします。

○大西委員 言い残したというところではないかもしれませんが、健康寿命を延ばすというのは、やはり私はそれが最終目的ではないのだと思います。

「楽しんで」といったキーワードも沢山出てきたのですが、何か自分が成し遂げたいことのために必要な基盤にはなります。けれども、副産物といえますか、日々の楽しい活動

を継続していることが、結果的には健康寿命の延伸に繋がったという、そういう位置づけが良いかなと思います。最初から、健康寿命を延ばそう、延ばそうと言って一生懸命頑張るのではなくて、家族とのつながりであったり、友人と出かけたり、ボランティア活動で社会参加をしたり、そういうようなところに自分の役割を見つけたりして、そのモチベーションや満足感が副産物的に健康寿命の延伸に繋がっているというのが望ましい姿ではないかと思います。

そういう意味では最初は“高齢者の”というところでスタートしましたが、自分の人生の目的をどのように達成するのかというところでは若い世代の意見も取り入れるし、それぞれの世代でできることは何かという形で、社会全体が同じ方向を向いて健康寿命の延伸が達成できるというのが、理想ではないかなと、全体像としてそういうような感想を持っております。以上です。

○梶井委員長 ありがとうございます。本当にそういうことだなと思います。

高齢者の方にいつまでも健康でいてねということだけが強調されるべきなのではなくて、若い頃から子供も含めて、このまちで育つ上でどういう人生を生きようとか、どんな夢を抱いていけるのかとか、それがあって初めて年を重ねたときに副産物としての健康寿命があったねということなんだという風に教えをいただきました。

そこは我々も戒めなければいけないことだと思います。子どもの時から夢を持って、希望を持って、目的を持って、だから健康でいられたというところに繋げていくということですね。健康寿命だけが最終目的ではないということでご意見をいただきましたけれども、本当にそうだなと思うところです。ありがとうございます。

では、高野委員お願いします。

○高野委員 私はたまたま桑園の近くに住んでいて、桑園の駅の周辺は病院がいっぱいあって、こんなに病院ばかりあっても皆行くのだろうかと思っ越してきた時は思いました。

最近になって色々な病院にかかるようになり始めて思うのは、この病気になったからどこの病院に行こうかということで結構皆さん悩まれますよね、なるべく良い病院に行こうと。それをどうやって調べようかと思うと、インターネットを使って、大量の病院の評価や口コミなどの情報から、病院を決めたりするわけです。

それから、テレビを見ますとサプリメントの宣伝が多いですね。これを飲めば元気になるとか、そういう宣伝が氾濫していますよね。

これは一例ですけれども、今は病院の情報、健康になりたい人の情報が氾濫しています。だからといって、手当たり次第にテレビの宣伝のサプリを飲めば良いというわけではないと思うんですよ。

何が言いたいかというと、何らかの方法で、色々な情報を自ら取捨選択しなくてはいけないということです。そういう意味では、例えばボランティア同士のつながりがあって、

もちろんボランティアの目的たる活動もする、だけどそれだけではなくいろんな話をする。「ここ調子悪かったんだけどどう思う？」とか、「こうやったら良いんじゃないの？」とか、そういうコミュニティを作っていくことが、日々降ってくる情報を整理することにも繋がっていくのではないかと思うのですよね。

今後ますますいろいろな情報がある中で、1つのコミュニティとしての情報を上手く整理整頓していけるような仕組みというものを、例えばボランティア組織のようなコミュニティを作っていくとか、そういうことがあっても良いのかなと思います。

○梶井委員長 ありがとうございます。でもそういうものって必要になってくると思うんですよね。まさに桑園とおっしゃいましたけれども、マンションが多くて病院も近いというところで、札幌以外の道内から移動されてくる高齢者が多くなると思うのです。

何が言いたいかと言いますと、そういう方は地縁が薄いので、まさに情報過多の札幌市で、高野委員が今おっしゃられたとおり、情報をどのように整理していけば良いのか、情報リテラシーもない場合もあるので、人とのつながりによって情報を精査していくという意味でも社会的つながりというものがやはり必要になってくる状況でもあるかと思います。

そういう意味では例えば相談アプリとか、相談窓口とか、そういうところも射程に入れて考えていかなければいけないのかなと思いました。ありがとうございます。

平本委員お願いします。

○平本委員 私、札幌市教育委員会の中学校の部活動を地域移行する委員会のメンバーになっておりまして。中学校の部活動は、従来中学校の先生が顧問として指導してきたのですが、地域で指導できる人に移行しましょうというものです。スポーツ等の場合、ある程度経験や技術のある方が指導すると成果が出るらしいのですが、文化芸術の分野というのは、実はポテンシャルがあり得るんですよね。高齢者と言ってもどこまでが高齢者なのかは別として、地域で潜在的に活用されていないリソースと、中学生の部活動というニーズをプラットフォーム上で上手くマッチングできるような仕組みがあると一石二鳥でありますし、社会的健康というところにも関係すると思います。

健康寿命延伸の話と言うのは、健康寿命だけに関してみると高齢者を中心とした話に見えるんですけども、もうちょっと広い社会の課題という点で見ると、今言った部活動の地域移行の話とこの話を上手く結びつけることができる可能性があって、札幌市が抱える色々な課題とか、時代の変化に応じて施策を変えていかなければいけないものとのリンケージといいましょうか、そういったことも全部は無理だとしても、この議論の中に入りそうなものには少し加えて考えることでより実効性の高い話になるんじゃないかなと思いました。以上でございます。

○梶井委員長 本当におっしゃる通りですね。ありがとうございます。高齢者のポテンシ

ヤルありますよね、それが結果的に教員の健康寿命にも繋がることもありうると思われました。本当に健康寿命と言うのは、そういう意味では高齢者だけじゃないということですね。山本委員お願いします。

○山本委員 健康寿命を延ばしたい、健康でいたい、これはおそらく誰もが望むことで、個人もそうだし、行政組織もそうだし、家族もそうだと思っていますよね。重要なのは、健康寿命がただ延びれば良いということではなく、結局のところ健康寿命の間に何をするのかということだと思っています。

少し前に「死ぬまでにしたい10のこと」というタイトルの映画が流行したことがあって、ああなるほどと思ったんですよ。今の日本というのは、目標設定がちゃんとできるようなゆとりのある社会になっているのでしょうかね。心配していることは、やりたいことがあるけどお金が不足しているとか、2,000万円ないと老後が心配など、そっちにいつまわっているんじゃないですか。そこを放っておいて健康寿命を延ばすというののもちょっとどうか、という感じがしました。

私はいまだに山に登るとか言っているのですが、目標があるから、健康を維持するという欲望が沸くわけです。その意味では、札幌市、北海道は恵まれていますよね、自然環境にしてもそうだし、リソースも良いです。ですから、そういう魅力あるエイジ・ド・ライフと言うか、そういうビジョン、イメージを発信しなきゃいけないと思います。本当に北海道札幌市が日本で1番魅力的なまちだとランキングにいつも挙がってくるのであれば、ビジョンが欠けていたらいけないですよ。ぜひ、そういう部分をこういった議論をする時に、なぜ札幌は日本で1番魅力的なまちランキングの上位に来るのか、結果だけを喜んでいたら駄目ですよ。積極的にビジョンを出して、だから我々は1番なんだという風になって欲しいなと思います。

○梶井委員長 ありがとうございます。意外と今まで“ゆとり”キーワードは出ていなかったんですよ。今まさに山本委員がおっしゃった、目標設定ができるゆとりのある社会、ゆとりのある札幌市になっているかどうかという。最終的にゆとりがないと目標設定、目標設定についてくる健康寿命というのが繋がっていきませんよね。だから、その辺りの見せ方ですね、あるいは札幌市民自身も魅力に気づいていないかもしれないので、こんな良いところがある、こんな良いものがあるというようなアピールが必要だと思います。

それでは、もうひとまわりすると色々深いご意見が出てきそうではありますけれども、ここでまとめさせていただきたいと思います。本当に色々闊達なご意見をいただきましてありがとうございました。

これからまた事務局の方で色々練っていただくかと思いますが、今日の議題はここで終了ということで、事務局にお返ししたいと思います。

#### 4. 閉 会

○事務局（西村高齢保健福祉部長） ありがとうございます。

ここまで3回にわたり、様々な角度からご議論を頂戴し、ありがとうございます。改めて感謝を申し上げます。

今後ですが、市民意識調査やアンケート、ワークショップ等を開催いたします。また、先ほどちょうどご議論もありましたアプリについても、どういったものにしていくかというのも今まで頂戴したご意見を組み合わせて検討していきたいと考えております。

その他、コールセンターも立ち上げまして、市民の意見を集めることも進めていきたいと考えております。

第4回目の委員会に関しましては、現時点で開催のタイミングをお示しすることが難しいものですから、改めて委員長と相談させていただきたいと考えております。

ここで、副市長の町田より、ご挨拶申し上げます。

○町田副市長 これまで3回にわたりご議論をいただいたことに深く感謝申し上げます。本当にありがとうございます。

高齢者を対象に健康寿命を延伸という話ではなく、そもそも健康寿命の延伸を目標として置くことは適切ではないのではないかといったご議論もいただき、なるほどと思うところでもあります。

各回でのご議論、委員の皆様から健康寿命を延ばすという課題は高齢者に限ったことではない、全ての世代に向けた取り組みを行うべき、それから、ただ健康寿命を延ばすという形で事業を打っていくのではないのではないか、そして、目標をどのようにおいていくのかといった深いご議論をいただいて、本当にありがたいなと思うところでもあります。

保健福祉局に限ったものではないという点については、平本先生から教育委員会の部活動の話もございましたが、まさに非常に大きな切り口かなと思ったりもしているところでございます。全庁横断的に、色々なセクションで連携していきたいと考えております。

今回事務局からお示しした具体案をベースに、デジタル技術を活用し、楽しみながら健康増進や社会参加に取り組んでいただける仕組みの構築を進めてまいります。事業構築にあたりましては、市民の声を反映するため、コールセンターを設置したほか、アンケートやワークショップなどを実施して、高齢者のみならず幅広い世代から、施策に対する意見やアイデアを得たいと考えております。

市民からの意見と、本委員会でご議論いただいた内容をもとに、市民の健康寿命延伸に向けた札幌市としての方向性を作り上げてまいりますので、方向性がまとまった際には、また是非ともご意見を頂戴できればと思います。

ウェルビーイングという言い方もありますが、なかなか日本語での表現が難しいです。だから、そういうものをどう具体化していくのかといったことも一つ施策としては考えていかなければいけないのかなと思った次第でございます。

本日は本当にありがとうございました。

○事務局（西村高齢保健福祉部長） それでは、本日の委員会は以上で終了とさせていただきます。ありがとうございました。